陸中紫波地方に於ける封建的遺制の1類

——農家宅地面積とその機能——

川 本 忠 平*

1. 序 本文は陸中紫波地方の農家宅地面積と其の機能構造を村落構成単位である總本家及び分家群との關係より吟味し、宅地内に殘存する封建的遺制の諸局面を指摘すると共に、これ等の現農村社會に於ける意義を解明せんとした。

2. 本家分家の宅地所有面積 一般に當地農家の屋敷構造は規模宏大、特に舊家と云われる大本家の屋敷の中には其の面積約1町歩前後に互るものがあり宅地内に早稲田苗代、畑地、果樹等を備え、其の西北部は概ね家久根（屋敷林）で圍まれ東南部は生垣で區劃されている。第1表(1)はこれ

第1表 宅地面積所有割合よりみた本家、分家の關係、(志和村の例)

		本家宅地坪數	第1次分家數及宅地坪數平均	第2次分家數及宅地坪數平均	第3次分家數及宅地坪數平均
總 本 家 (屋 敷)	大 七	1201坪	5戸434坪	6戸333坪	1戸152坪
	栗 田	850	5 347	5 344	4 115
	太田元	1000	5 299	5 157	0 0
	杉屋敷	1208	9 412	3 311	0 0
	北 田	599	11 296	6 127	1 217
	沖 田	1617	12 443	8 313	1 133
	漆 原	1250	8 444	2 140	0 0
	漆 立	1300	13 316	7 118	0 0
	大金田	942	8 224	11 278	5 142
	浦 田	1140	12 340	2 193	0 0
	岡 田	1720	8 499	10 331	2 199
	大越田	980	7 313	7 204	3 169
平 均		(a) 1151	8.6(b) 364	6(c) 237	1.4(d) 161
宅地分地 割 (%)		$\frac{a}{a} 100.00$	$\frac{b}{a} 32.00$	$\frac{c}{a} 21.00$	$\frac{d}{a} 14.00$
			$\frac{b}{a} 32.00 \longrightarrow \frac{c}{b} 65.10 \longrightarrow \frac{d}{c} 68.90$		

等農家の宅地面積所有關係を本家分家の立場より考察したものであるが、これによると岡田本家の 1720 坪を最高とし、北田本家の 599 坪を最小として本家 1 戸當り平均宅地面積は 1151 坪となる。更に第 1 次分家群が 1 戸當り 364 坪、第 2 次のそれが 237 坪、第 3 次が 161 坪を示し本家のそれを基準として概ね 10 : 3 : 2 : 1.5 の割合をもつて縮少している。かくの如く宅地面積縮少傾向が第 1 次分家に著しく第 2、第 3 に移るに従つて輕少であり、本家のそれを基準として一定の比率を示したことは如何なる意味を物語るか。

3. 宅地利用と其の機能 陸中志和村の標準型本家と見做される大七本家及び其の分家の宅地利用をみるに本家宅地面積 1201 坪、其のうち内田 1 反歩、苗代 9 畝、畑地 4 畝、果樹 2 畝、建坪及び其の他 450 坪を有し屋敷の北東部は家久根、南西は生垣を配置している。尚瀧名川より出る馬場

第 1 圖 陸中志和村に於ける大七本家の宅地利用

- 1 母屋. 2 うまや. 3 便所. 4 土蔵
5 板小屋. 6 稻小屋. 7 風呂場.
8 備荒倉. 9 水車. 10 墓地. 11 地神

備考 岩手縣紫波郡志和村上平澤字 8 地割

ては母屋、厩、便所、土蔵、板小屋、風呂場があり 3 坪の墓地及び種井戸を有し家久根、生垣を配置するのは本家とほぼ同じ形態であるが、水車小屋、備荒倉、地神、稻小屋等の施設を見ないことは内田、苗代の變化と共に注目すべきであろう。これが文

壇が宅地の中央部を東西に貫流し其の水口に水車小屋が設けられ母屋、厩、便所を中心に土蔵板小屋、稻小屋、備荒倉、風呂場があり、又地神、墓地、種井戸を備へ所謂總本家的形態を有している。隣村水分村に於ける本家久保屋敷の如きは總面積 1 町歩を占め宅地内に 2 個の溜地を有し、又志和村沖田本家は駒馬屋と稱する種附馬屋を配置せしめている。これが大七本家の最も古い久田分家になると（寶永 6 年分家）宅地面積 388 坪

に縮少され其の内部に内田、苗代は無く宅地に隣接する外側に苗代が設けられ畑地 3 畝果樹 2 畝を有するに過ぎない。しかし建物に於

第2圖 久田分家の宅地利用

備考 岩手縣紫波郡志和村上平澤字6地割

化2年に出た孫分家久田かまどに至つては宅地278坪。更に明治4年に分離した北かまどに於ては197坪の縮少をみると共に母屋、厩、便所の“3棟1かまど⁽²⁾”を基準とし若干の附屬小屋があるに過ぎない。そこで當地方の本家宅地利用を特色づける内田、苗代、水車、備荒倉の配置、更に敬神崇祖の對象である地神、墓地等の存在に就き其の機能及び意義を明らかにせねばならない。内田、苗代は總本家の所有耕地中最も肥沃な熟田に設けられ、當本家開拓期に於ける發生田の性格を持つと共に（當家一族の初期開拓田）嘗ての氏神の遺制と見做される地神と密接な關係を有している。殊に内田は殆んど早稻田であり、こゝより收穫された新米は新酒と共に地神に供饗される。これは9月9日（舊曆）の重陽の節句に行われ同19日、29日は勞働休日に當り新米にて餅を搗く。これを九日餅と稱し各分家は本家の地神にこれを供え本家にて新米、新酒、新餅をもつて共同會食をなす習慣が残存するが恐らくこれは直會⁽³⁾の傳統が残されたものであろう。従つて内田、苗代は當本家一族の發生田であると共に氏神に新米、新酒を供饗する氏神田としての性格を兼ねている。これを經營形態よりみると共同經營的性格が強く、同村の沖田本家、或は浦田本家の如きは明治10年頃迄本家、分家の共同經營によつて營まれていた。しかし最近内田は殆んど自家經營によるが、苗代の一部は苗作小作形態をとり、又分家にして苗代を持つ農家と雖も苗の一部は本家宅地苗代より持ち歸える傾向を有する。これはひとり當村のみならず、隣村水分村の⁽⁴⁾久保屋敷が分家6戸に、飯岡村の神田が7戸に、或は高畔屋敷が9戸の分家に、更に煙山村の木城では8戸の分家群に苗代小作制をしいている。これ等は氏上、氏子による嘗ての氏族制度が氏神の祭祀及び直會を通して其の團結をはかり、共同飲食に基く共同生産經營の斷片的遺制と推察するが、凡そ敬神崇祖を中心とした生産經營及び生活態度は封建時代を通じて近代社會に傳えられた我が國家族制度の特徴と見做され、稀有の事例ではない。従つて本家宅

地苗代にみる分家の小作慣行及び勞働返還による本家苗の一部分讓等は嘗て内田、苗代が地神を中心とする當家一族の共同體經營として營まれたことを物語るものではなからうか。これを發展過程よりみると本家宅地苗代は最初内田に附隨するものであつたが、分家派出と共に分家所有田への苗給源となり、本家と分家の共同耕作として營まれ、これが苗代小作慣行を一般化せしめた一因と推察される。其の後、土地改良、生産技術の進歩に伴つて各分家が各自の熟田に苗代をとり獨立的經營をなすに至つたものと解する。従つて各分家が自家占有の苗代を所有するに至る迄は本家の宅地苗代に依存した農業經營をとり、——これは本家採用の「種もみ」を本家より支給されて經營したのと同意義を有する——此の立場より分家農家經營の自由性が本家のそれによつて制約されたことは當然である。恰も⁽⁵⁾燃料、肥料給源としての山林採草地が一般分家に分割されることが少く本家のそれを無償で使用することが許される反面、本家への勞力奉仕を立前としたのと密接な關係を有する。

即ち分家は本家の宅地苗代より「種もみ」を、山林採草地より「肥料」「飼料」の供給を受けて、其の經營を可能ならしめて來たものと云えよう。かくの如き性格を持つ苗代小作慣行は明かに分家の獨立的經營心に基いた近代的農家經營とは見做されないであらう。

しかるにこれが農地改革後の今日、尙殘存することは色々な要因があると思うが先ず (a) 民俗的意味に於て内田、苗代が地神に對する氏神田の性格を持つことより地神をもたない分家群にはその必要がなく、内田苗代面積を差引いた宅地面積が一般分家に與えられたと見做される。(b) 又新分家の派出と共に耕作地の縮少を伴い水田、苗代の分散耕作が餘儀なくされると共に屋敷地が水田可能地をさけて畑地或は台地上に占居せざるを得なかつた地理的制約性を見逸してはならない。殊に藩制時代に於ては正徳5年⁽⁶⁾に南部藩の分家制限令が出され“高の目”(耕地)に屋敷どりすることを禁じているが、唯“明屋敷”或は“野際、御山裾通”への分地は許可されている。更に文政4年4月⁽⁷⁾にはこの藩令に違反した分家屋敷の移轉とりこわしが行われ、又安永5年⁽⁸⁾にも嚴重な制限令が出されている。これは藩の財政政策的見地より水田及び其の可能地の縮少を牽制したものであり、尙一般農家も水田地域をかけて其の屋敷どりをなす慣習を有した。(第3圖參照)ここに分家屋敷どりが台地或は荒地に占居せざるを得なかつた爲、一般分家宅地内に苗代及び内田を設けることが極めて困難であつ

た。(c)しかるに内田苗代が本來共同經營の性格を有したことより苗代小作慣行が一般に採用され、これが當地農民の傳統的經營となるに至り、今日其の殘存を見たものと推察されるのである。

次に宅地内部に墓地を持つ形態は相模⁽⁹⁾の津久井郡内郷村、武蔵入間郡飯能郡の山沿部落、同南多摩郡淺川村にも存在するが、明治8年の公葬地埋葬の法的制定をみてより全く消滅するに至つた。しかしこれがそれ以前

第3圖 分家派出に於ける3屋敷地の位置
中田分家の1例
陸中紫波郡土館村字中田94地割

に有した機能は注目すべきであり特に本家の多くがこれを所有し諸分家の先祖を埋葬したことは本家分家の血縁的關係に基く精神的紐帶として最も強力なものであつた。従つて墓地の所在も前條件と同様に、本家隸屬關係を維持して來た要因と見られるが、殊に內的隸屬關係として封建的構造を支えて來たことは疑う餘地

がない。

尙備荒倉（農業共同倉庫の前身）及び水車小屋（電動機、發動機の前身）の存在もこれに劣らぬ重要な機能を有している。備荒倉の設立時期は明治5年の農地改革に端を發し同15年頃一般に設立されたもので凶作に對する自己救済の農民的自覺に基いたものである。これが主として本家の宅地内、又は部落長等の有力者の宅地に設けられ主として本家、分家を中核とする血縁的構成員によつて組織された。其の機能は加入農家の耕作面積の多少にかかわらず各戸當り1石4斗の米穀を收納し、凶作又は加入者の困窮者に粃7斗に對し年利息1斗の割で借しつけを行つた。又規模に於ては當村大越田本家の如く約30戸の加入者による大組織を持つものがあり、小規模によるものでも約10戸以上の加入農家によつて營まれたが其の管理一切は本家又は有力者にゆだねられていた。即ち備荒米に對する一切の管理權を本家にたくし鼠害による損失は本家の責任となし管理權を中心として若干の處分權も兼ねていたことは當備荒倉が自由制土地改革に根ざす農民的自覺の一表現とは云え、其の根柢には本家中心主義的封建意識の潜

在を是認し得る。又動力源としての水車は米搗用に用いられ主として總本家に多く配置されていた。従つて諸分家は米、粟、麥、稗等を本家に持参し其の使用が許される反面、勞力奉仕の強制を立前としていた。これ等は山林採草地隸屬型分家制と同じ性格を示すものと見做されよう。

4. 宅地に於ける封建的機能の分布率 第4圖は敘上に見た本家の格式條件が如何に分布しているかを示したものである。これによれば總本家は何れも内田、苗代、地神所有率に於て8割以上を示すに反し第1次分家に至つては内田1割、苗代2割、地神1割の低率を示し特に内田は第2次、第

第4圖 宅地利用に於ける本家的格式機能の分布圖

備考 格式機能は現存するもの及び其の痕跡の明瞭なものとつた。

3次分家に皆無である。従つて宅地面積所有割合よりみた本家、分家の關係に於て本家宅地面積の約3分の1が第1次分家宅地面積であつたことは主として此の内田、苗代の除外縮小に基くものと見做され、本家宅地面積より内田、苗代を除いた宅地面積が一般分家に附與される傾向を示している。

更に内田所有割合と地神のそれとがほぼ同率傾向を有することは本來内田が地神に對する氏神田の性格を有したことを裏附けするものと思う。しかし宅地苗代の比較的高率所有傾向を見たのは最良苗の育成と云う農業經營上の要求に基き、土地改良の進歩に伴つて冷害、

風害の輕少な宅地内に漸次これを設けるに至つたものであろう。此の立場より宅地苗代を全くもたない第3次分家は宅地外部の自家苗代を有するとは云え、本家宅地苗代への依存度の最も高い分家群と見做されよう。

かくして内田、苗代所有の激減的傾向はたしかに封建的主従關係を維持して來た要因と思うが、これが民俗的、經營的及び政策的背景より分家屋敷どりの位置が、苗代、内田を設けることの困難な自然的條件に制約されていた。こゝに今日尚、苗代慣行にみる半封建的性格の殘存を許した。一方墓地、備荒倉、水車等の所有率が前者とほぼ同傾向を示すも其の機能は

殆んど失われ前者の如き強力な力関係を内在していない。これは前者が内田、苗代を持つことの至難な地理的條件に支持されているに對し、後者のそれが主として封建意識に基く隸屬關係を其の基盤とした爲、生産技術の發展、近代思想の擡頭により、前者に比してより敏速に其の機能を失うに至つたものであらう。

5. 結語 敘上の分析により一應其の要約を摘記すると(1)本家、分家宅地面積が第3次分家に移行するに伴つて10:3:2:1.5に相當する規模的變化を伴うことは、宅地利用からみて本家隸屬型分家制を内包した規模的變化であることを認め、此の立場より決して無秩序に村の形成がなされたものではない。(2)殊に總本家は内田、苗代、地神、墓地、備荒倉、水車等を所有し、これが各分家群に隸屬關係を結ばざるを得ない必然的因子となり本家の主體性を維持せしめて來た。(3)就中内田、苗代は發生田、神田、共同經營的性格を有し、これを除いた宅地面積が分家宅地規模の一般の基準と考えられる。(4)これは民俗的、共同經營的立場より、一般分家の内田、苗代所有の必要性が低くかつたこと、更に藩の政策的強制、及び分家慣習に於て分家屋敷どりが、内田、苗代所有に困難な地理的位置に占居せざるを得なかつたこと、等に基因する。ここに極めて強い苗代小作慣行が残存して來た諸要因を認めるのである。(5)其の他の諸機能は封建的意識に基くとは云え其の根柢に固定的自然條件を持つことが稀薄であり生産技術制度の改變、交通速度の發展により、其の現在の機能は殆んど失われるに至つたものと解するのである。

本研究に當り御指導を賜つた岩手大學森嘉兵衛博士に深謝の意を表する。

(昭和26年6月2日受理)

参考文献及註

- (1) 紫波郡志和村熊谷新五郎氏所藏「漆立持地證文並別家仕分證文」及び志和村役場地祖名寄帖に基く。
- (2) 熊谷新五郎氏所藏「別家仕分證文」。“母屋、馬屋、雪隠を三棒一かまど”となし分家贈與最低基準とした。
- (3) 柳田國男：日本の祭 P. 112 一直會の意義— 弘文堂
- (4) 村田孝介：散村の屋敷形態に就て—陸中紫波地方の1例— 東北地理1卷1號
- (5) 拙稿：封建的土地所有の崩壊と酒造出稼 未刊
- (6) 和賀十二ヶ村小原無學文書「御用留帳」南部藩分家制限令之事
- (7) 前掲「御用留帳」に「……高目迄家相立候基不埒之至候、速取潰村方之内明

家屋或野際御山裾通宜地場所見立申候、引移可申候……云々」とある。

- (8) 根田龍次郎氏所藏「大宮崎文書・見前村肝入御用留書帳」

安永5年農民に令達せる南部藩の分家制限法令の但し書きに、一但し役地高目に家相建候儀前々より御停止候、尙以此未急度相守申候、尤明屋敷に家相建候儀先達而被仰仕候通尙以願上普請可申事一云々とある。

- (9) 今和次郎：日本の家屋 P. 53 相模書房

Some Remains of the Fedual System Still Surviving
in the Shiwa Districts in Rikuchū.

—The Scale of the Homestead and its Function. —

Chuheï Kawamoto*

1. When we compare the scale of the homestead of the head family with that of the branch family, we find that the newer a branch family is, the smaller is the scale of its homestead. From the way in which the homestead is put to use, we see clearly that this difference in the scale of homesteads implies that the branch family system is subordinate to the head family.
2. The paddy fields and rice-nurseries within the boundary of homestead are mostly owned by the head families, and the branch families are obliged to depend upon the head family for rice-nursery. The standard scale of the homestead of a branch family is generally the remainder of the homestead of the head family when the paddy field and rice-nursery are taken away from it.
3. It is this reduced scale of the homestead of the branch family that is responsible for the survival of rice-nursery tenancy, in which the tenants are dependent upon the rice-nursery of the head family.

* Geographical Institute, Liberal Arts Faculty, Iwate University